

高大連携による探究的な学習についての現状と課題

—京都府北部の公立高校の事例研究を踏まえて—

Current status and issues about Inquiry based learning
Through collaboration between high school and university:

Consideration from case study of public high schools at Northern Kyoto prefecture

杉岡 秀紀

要旨

本論は、2022年度から全国の高等学校で全面実施される探究的な学習、具体的には「主体的で対話的で深い学び」の視点を生かした授業づくりの実装を踏まえ、全面実施以前から自主的かつ先行的に探究的な学習を実践してきた高等学校に焦点を充て、高大連携による探究的な学習の現状と課題を明らかにすることを目的とする。

具体的には、京都の公立（府立）高校を事例に、京都府教育委員会が実施した府立高校アンケートの考察も踏まえつつ、高大連携による探究的な学習が進む京都府北部の高等学校3校の校長等へのヒアリング調査を通して、その現状と課題を明らかにする。最後にその比較考察から得られる示唆を導出する。

キーワード：高大連携、探究的な学習、京都府教育委員会、福知山高等学校、宮津天橋高等学校

Keywords: collaboration between high school and university, Inquiry based study, Kyoto Prefectural Board of Education, Fukuchiyama High School, Miyazutenkyo High School

1. 研究目的及び方法

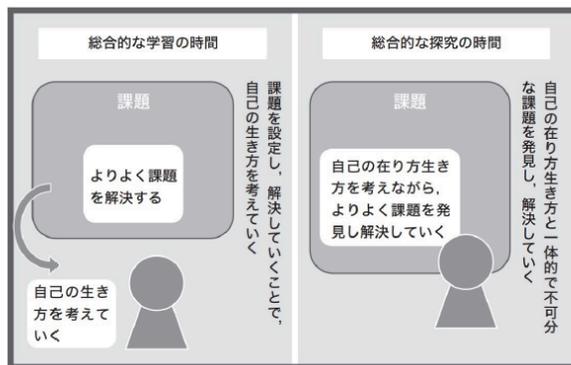
2018年に改正された民法により、2022年4月から日本の成年年齢が18歳に引き下げられる。18歳と言えば、高等学校（以下、高校）進学率が99%となった現行では高校3年を含むこととなる。もっとも法律上の成年（大人）年齢と実感として年齢が一致するか否かはともかく、日本では2015年に公職選挙法が改正され、選挙権年齢はすでに18歳となっている。その意味では、この改正でようやくこれまでバラバラだった成年年齢、選挙権年齢、また結婚年齢などが18歳で統一され、良し悪

しは別としてもグローバルスタンダードに追いついた形となる。

ところで、2018年と言えば、新しい高等学校学習指導要領（以下、新学習指導要領）が告示され、「総合的な探究の時間（以下、総探）」に始まり、古典探究、地理探究、日本史探究、世界史探究、理数探究基礎、理数探究など数多くの探究科目の設定が行われることが決まった年である。全面実施が2022年¹からというのも先の民法改正と同じである。ともあれ、「戦後最大といえる高等学校の授業改革が始まる年」（田中 2021:212）になることが予期される。今回の改正の狙いは「主体的で対話的で深い学び」の視点を生かした授業づくりの実装であり、キーワードは「社会に開かれた教育課程」、そして「学力の3要素」（知識・技能の確実な習得、思考力・判断力・表現力、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度）であり、こうした探究学習が求められた背景には、アメリカやオーストラリアなど教育先進国の国々で問題解決的な学習（Problem Based Learning）や教科におけるプロジェクト学習（Project Based Learning）、協働的な学習（Collaborative Learning）などが拡がり、生徒の成績や進学実績が高まっているという結果が出ていることがある。また、これらは米国発で広まった21世紀スキル²やOECDのDeSeCo（Definition and Selection of Competencies:コンピテンシーの定義と選択）プロジェクトが提案するキー・コンピテンシー³などを踏まえた非常にグローバルな視点も意識したものである点も見逃せない。

もともと2000年度からすでに全ての高校で「総合的な学習の時間（以下、総学）」という科目は先行して導入されてきたし、現行の学習指導要領の中においても、例えば理科の諸科目において「探究活動」という用語で、実験や観察を通した仮説検証を伴う課題解決的な学習は行われてきた。また、一部の高校ではこの新学習指導要領を待つまでもなく、先行して総探に移行し、自主的かつ先行的な実践が積み重ねられている。ただし、此度の改訂は図1のように単に課題解決の視点だけでなく、「自己のあり方生き方と一体的で不可分な課題を発見し、解決していく」と、より自己の在り方生き方が強調されている点、そして、例外なく全高校で全面実施されると決めた点に最大のポイントがある。

図1 「総合的な学習の時間」と「総合的な探究の時間」



(出所) 文部科学省 (2018)

繰り返しになるが、一部の高校では、ここ数年来、総学をベースにしなが、自主的かつ先行的に自校に必要な探究的な学習のあり方を先取りで模索してきた。すなわち「これから」全国で展開される探究的な学習のヒントは、すでに「これまで」の探究的な学習の中にあると考えられる。そして、こうした探究的な学習というのは、研究と教育、社会貢献をミッションとする大学においては、日常的に取り組みられているものであり、大学との連携、すなわち高大連携に多大なヒントを求めることができる。

そこで、本論では、これまで自主的かつ先行的に高大連携により探究的な学習を展開してきた事例、とりわけ京都府内の府立高校の高大連携による探究的な学習に、2022年度から全国で展開される探究的な学習への示唆を導出することとする。

2. 高大連携による探究的な学習の背景

2.1 高大連携や高大接続をめぐる動向と用語の整理

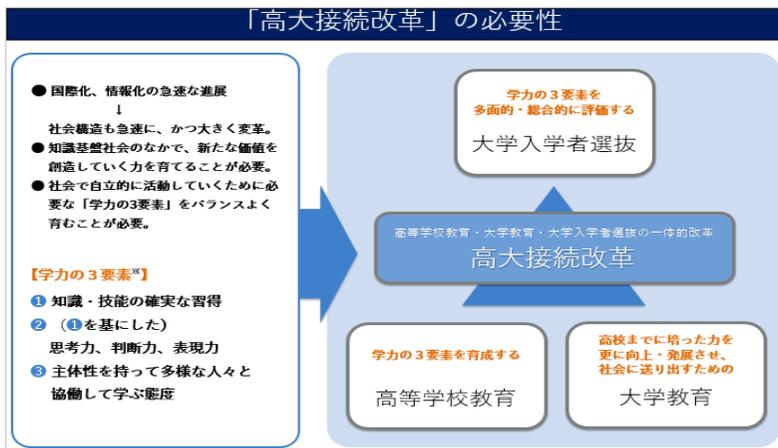
ところで高大連携や高大接続という用語は、いつから登場したのだろうか。管見の限りでは、グローバル化、情報化、少子化など社会構造が大きく変化し、高校の教育内容にも多様化が進む中で、大学もその変化に対応すべき、との文部科学省（以下、文科省）大学審議会による答申「21世紀の大学像と今後の改善について」（1998年）、そして、高大での連携や円滑な接続を具体的に提示し推奨した中央教育審議会（以下、中教審）による答申「初等中等教育と高等教育の接続の改善について」（1999年）を受け、登場したのが初出と思われる。内容としては、（1）高校生が大学レベルの教育を履修する機会の拡大、（2）大学が求める学生像や教育内容等の情報を的確に周知するための方策、（3）高校における生徒の資質に応じた進路指導や学習指導の充実、（4）入学者の履修歴の多様化に対応して大学教育への円滑な導入を図る工夫、（5）高校関係者と大学関係者の相互理解の促進、というものであり、一言でいえば「高校と大学との連携や接続による教育活動や研究活動、その他交流活動等」という意味である。ただし、高大連携や高大接続という用語を使うかどうかともかく、出前（出張）講義や模擬講義、オープンキャンパスや学校説明会、勉強会などはそれ以前からも存在しており、その意味では高大連携や高大接続というのは古くて新しい概念と言えよう。とはいえ、「大学と高校の双方が受験という接点だけに関心を持ち、それぞれで行われている教育について無関心であった」（筒井和幸ほか 2012:13）との指摘もあるように、先駆的な事例を除けば、イベント的な一過性の取り組みも多かったのも事実である。

いずれにしても、これらの答申が発表された後は、文科省は様々な高大連携や高大接続を支援する事業を展開し、全国的な広がりを見せるようになった。例えば、2002年度から科学技術系人材の育成を目的としてスタートした「SSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）」や2006年度から英語が使える日本人の育成を目的としてスタートした「SELHi（スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール）」、また、2014年度から国際的に活躍できるグローバルリーダーの育成を目的として

スタートした「SGH（スーパー・グローバル・ハイスクール）」⁴、2019年度から Society5.0 や社会を地域から分厚く支える人材の育成を目的としてスタートした「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」⁵、2020年度から将来イノベティブなグローバル人材を育成するために高校と国内外の大学等が連携し高度な学び提供をすることを目的としてスタートした「www（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築し支援事業」などが好例である。

そして、ここ 10 年はとりわけ大学入学者選抜を中心とするいわゆる「高大接続」について踏み込んだ議論が進んだ。具体的には、2012年に文科大臣から中教審に対し出された諮問「大学入学者選抜の改善をはじめとする高等学校と大学教育の円滑な接続と連携の強化のための方針について」を受け、中教審の「高大接続特別部会」が2014年に「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」という答申を出した。2015年には文科省が「高大接続改革実行プラン」を策定し、文科省内に「高大接続システム改革会議」が設置された。その中では、高校生の学習意欲喚起や基礎学力向上等を目的とした「高等学校基礎学力テスト（仮称）」や大学入試センター試験に代わる「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」のあり方、個別選抜の改革、多様な学習活動・学習成果の評価のあり方などが検討された。その後、2016年には「高大接続システム改革会議『最終報告』」が取りまとめられ、2017年には、大学における3つの方針の策定・公表義務化、高校生のための学びの基礎診断や大学入学共通テストの実施方針策定など高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜を一体的に改革する「高大接続改革」の具体化に向けた制度設計が進められた（図2）。

図2 高大接続改革のイメージ



(出所) 文部科学省ホームページ

こうした議論の流れが結実したのが先述した新学習指導要領の告示(2018年)ということになる。なお、ここで強調される「自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を発見し、解決して行く学習

過程」というカリキュラムについての考え方や「自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見解決していくための資質・能力」という身につけるべき知識やスキルについての考え方、また「主体的・対話的で深い学び」という教育方法については、いずれも大学における教育・研究と親和性が高いと考えられる。大学サイドからもすでに「大学に入ってから能動的な学習態度を育てるといのは実際は手遅れ」（宗宇 2021:pp.58）との指摘もあり、双方にメリットがあると言えよう。

その後もさらに高大接続改革の議論は進み、2021年には「大学入学者選抜における多面的な評価の在り方に関する協力者協議」にて対面的・総合的な評価の内容や手法、調査書及びその電子化に係る見直しを取りまとめられ、その後に設置された「大学入試のあり方に関する検討会議」においては、記述式問題の出題のあり方や総合的な英語力の育成・評価のあり方、新学習指導要領に対応した大学入学共通テストの科目構成等の提言が取りまとめられた。

以上の整理から分かるように、大学入学者選抜の実際の運用を巡っては確かに紆余曲折があったものの、この10年で高大接続の仕組みは確実に変容したと言えよう⁶。しかし、図2で示した文科省が言う「高大接続改革」、すなわち「高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜を通じて学力の3要素を確実に育成・評価する、三者の一体的な改革」については、現行はまだ未完と言わざるを得ない。誤解を恐れずに言えば、大きく変わったのは狭義の高大接続とも言うべき大学入学者選抜が主であり、高校教育の改革はむしろ今回の新学習指導要領の全面实施となる2022年度から、大学、とりわけ高大接続改革の視点からの大学教育改革については新学習指導要領を経験した高校生を受け入れる2026年度からになると言えるのでないだろうか⁷。

したがって、本論では、現行はまだ「高大接続」の一步前の段階、すなわち「高大連携」の段階にあるとの認識のもと、以下では「高大接続」ではなく、「高大連携」という用語を使用し、その視角から探究的な学習の考察を行うこととする。

2.2 高大連携による探究的な学習の先行研究

高大連携による探究的な学習の先行研究については、高校側の視点から論じたものと大学側の視点から論じたものに大別される。また、後者についてはさらに高大連携による探究的な学習に伴走した実践事例の報告が多く、その他共同研究を実施したものや大学入学者選抜に焦点を充てたもの（狭義の高大接続）などが存在する。

高校側の視点から論じられた先行研究としては、卒業生の大学院生・学部生を招いたセミナーや大学研究室訪問、公開講座の受講、大学教員による英語の授業による高大連携の事例紹介した原田恵子（2014）や高大連携による探究科目として取り組まれた人文地理の事例を考察した橋本淳史・菊池真（2021）などがある。

次に大学側の視点から論じられた先行研究のうち、高大連携による探究的な学習に伴走した実践事例の先行研究としては、高校のSSHの放射線課題研究に大学教員がゼミ形式で実験の伴走した教育実践事例を紹介した中村琢（2013）、大学院生・大学生・研究生がSGH指定校の文学の探究講座の

支援・指導に当たった事例を考察した細矢衛ほか（2018）、北海道の高校への大規模な調査をもとに総合的な学習（探究）における高大連携プログラムのあり方をシリーズとして検討した椿達ほか（2018、2019、2020）および五浦哲也ほか（2018、2019）、大学教員と大学生が高校生を対象に探究型学習のテーマにした講演やワークショップを行った事業を考察した堀籠崇・田中一裕（2019）、大学教員や大学院生が SGH 指定校のアカデミックライティング教育に取り組んだ実践による生徒の自己肯定感を考察した堀一成ほか（2019）、高校と大学による高大連携プロジェクトを経験した生徒・学生の自己評価を比較調査した江頭知遠ほか（2020）、大学教員が設計から関わる SGH 指定校におけるチームで探究活動を行う生徒の分析や総合的な探究の時間とキャリア展望の関係について考察した乾ほか（2020、2021）、高大連携で関わる高校の探究学習に対する生徒のイメージやスキルに影響を及ぼす要因を分析した高野ほか（2021）、大学生がボードゲームを通して高校生の主権者教育に貢献する高大連携事業を考察した宗宇（2021）、複数の高校生を対象に SSH に類似する大学が理数教育をテーマとした課題探究教室を開講した事業を考察した須田順子ほか（2021）、大学サポーターによる探究活動における役割を考察した醍醐身奈（2021）などがある。また、高大連携により共同研究を実施したのものとしては地方方言について高大連携で共同研究した教育実践を考察した村上敬一・田島幹大・吉平綾加（2017）がある。そして、大学入学者選抜に焦点を充てた代表例としては、附属高校から親大学に進学しない生徒の増加を問題視し、探究的学びや高大接続教育の必要性や重要性を大学内で共有しつつ、「課題探究型入試」を創設したプロセスを紹介した川口潔（2021）がある。

以上のレビューから分かる通り、既存の先行研究は、大きくは授業担当者あるいは伴走した教員による教育研究実践を事例研究として紹介したものや探究的な学習の効果を検証したものが多く、トップ（校長）の視点から高大連携を検証したものや高大連携そのもののあり方について論じたものは少ない。また、いずれも単独の高校や高大連携事例を取り上げるものが多く、高校間の比較視点から考察したものも少ない。

そこで、以下では、京都の公立（府立）高校を事例に、京都府教育委員会が実施した府立高校アンケートの考察も踏まえつつ、高大連携による探究的な学習が進む京都府立福知山高等学校、京都府立宮津高等学校・京都府立宮津天橋高等学校、京都府立加悦谷高等学校の校長等へのヒアリング調査を通して、その現状と課題を明らかにする。最後にその比較考察から得られる示唆を導出したい。

3. 京都府の公立（府立）高校と高大連携

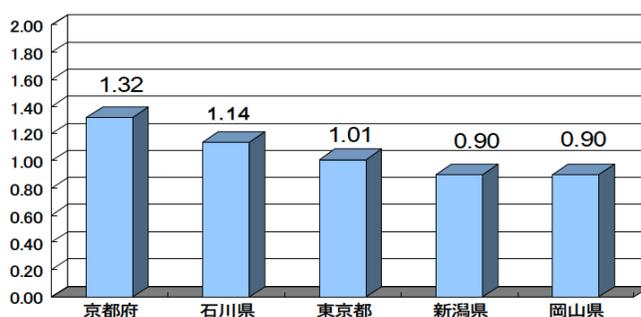
3.1 京都府の公立（府立）高校の選定理由

以下では京都府、その中でも公立（府立）高校を事例に取り上げ、探究的な学習の現状と課題を探っていく。大前提として、本論で着目する探究学習という教育手法を高校にいち早く注目し、取り入れたのは京都の公立高校であった⁸。しかし、そのことを一旦横に置いたとしても、京都府を取り上

げるべき理由は3つある。1つは京都府における大学等進学率が67.8%（全国平均55.8%。2020）と5年連続全国1位、京都府の産業における特化係数も教育・学習支援事業が全国1位（2016年経済センサス活動調査）となっており、探究的な学習も含め特色ある学習を展開する高校が多く立地するからである。このことは高校卒業者に占める就業者の割合が東京を除く全国で最も低いことから裏打ちされている。

2つは、本論の関心である高大連携において高校のパートナーとなる大学が京都には多く立地するからである。大学の総数そのものは34校（国立3、公立4、私立27）と全国6位であるが、京都は全国10万人あたりの大学数が1.32校と全国1位となっている（図3）。「量質転換」という言葉があるが、良い事例を創造したり、発見したりするためにも量があることは重要なファクターであろう。

図3 人口10万人あたりの大学数



（出所）総務省（2021）

3つは、高大連携による探究的な学習のための土壌づくりに貢献するプラットフォームが京都では全国に先駆けて誕生したからである。周知の通り、京都では1994年に全国に先駆け公益財団法人大学コンソーシアム京都（以下、大学コンソ）が設立され、現在48の大学・短期大学が加盟している。2003年度には大学コンソの呼びかけにより「京都高大連携研究協議会」が発起し、その企画検討・運営を担う専門部署である「高大連携推進室」も設置された⁹。そして、2003年度から約20年に渡り「高大連携教育フォーラム」という全国向けの高大連携をテーマにするイベントも継続実施している（表1）。また、近年では高大社連携フューチャーセッションというキャリア教育プログラムも例年展開している。こうした組織や取り組みが長年継続しているのも京都の持つ特徴である。

いずれにしても、上記のような理由により、本論のテーマである高大連携による探究的な学習の現状と課題を掘り下げる対象として京都府の公立（府立）高校は相応しいと言える。

表 1 高大連携教育フォーラムのテーマ一覧

2003 年度	第 1 回	連携例にみる高大連携の可能性 —京都の高大連携を中心に—
2004 年度	第 2 回	学びの接続を実現するために
2005 年度	第 3 回	新局面を迎えた高大連携
2006 年度	第 4 回	学力構造の変化と高大連携の可能性 —新局面を迎えた高大連携Ⅱ—
2007 年度	第 5 回	高大連携の在り方を検証する
2008 年度	第 6 回	高校新教育過程と接続教育の課題
2009 年度	第 7 回	高大連携から接続教育への視座 —高大で考える「生きる力」の育成—
2010 年度	第 8 回	新しい時代に求められる能力をどう育成するか —高大接続テストの持つ意味—
2011 年度	第 9 回	新学習指導要領が求める学力とは
2012 年度	第 10 回	これからの時代に求められる能力をどう育成するか —教育目標を明確化するために—
2013 年度	第 11 回	新しい時代を拓く高大接続の「学び」とは —京都からの発信—
2014 年度	第 12 回	高大接続と学力形成 —達成度テスト（仮称）について考える—
2015 年度	第 13 回	アクティブ・ラーニングへの模索 —「教える」と「学ぶ」のリンクを考える
2016 年度	第 14 回	いま、なぜ入試改革か？ —教育改革のゆくえを探る—
2017 年度	第 15 回	今育成すべき力は何をともに考える —高等学校の役割・大学の役割—
2018 年度	第 16 回	今育成すべき力は何をともに考えるⅡ —高等学校の役割・大学の役割 次期高等学校学習指導要領と高大接続の本質—
2019 年度	第 17 回	「教育の接続」としての入試改革 —高校までの資質・能力の育成を大学でどう評価するか—
2020 年度	第 18 回	「教育の接続」としての入試改革Ⅱ —高校教育の指導と評価が変わる 高校・大学は入試と教育にどう向き合う—
2021 年度	第 19 回	探究的な学習から研究へ —教育改革のジャンピングボードとなるためには—

(出所) 公益財団法人大学コンソーシアム京都 (2021)

3.2 京都府立高校の概況

京都府教育委員会（以下、府教委）は、2021 年 3 月に今後 10 年間の京都府の教育の目指すべき方向性を示した「第 2 期京都府教育振興プラン（以下、教育振興プラン）」を策定した。ここでは「目ま

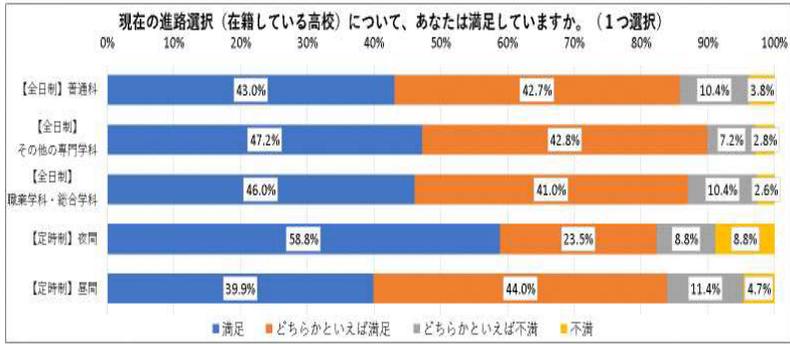
ぐるしく変化していく社会において、変化を前向きにとらえて主体的に行動し、よりよい社会と幸福な人生を創り出せる人」を目指す人間像に掲げ、「主体的に学び考える力」「多様な人とつながる力」「新たな価値を生み出す力」の3つをはぐくみたい力として設定する。

この教育振興プランを受け、府立高校が果たすべき役割や、生徒がこれからの時代を切り拓いていくことができる力をはぐくむ魅力ある府立高校づくりを検討すべく、2021年5月には「府立高校のあり方ビジョン（仮称）検討会議」が立ち上がり、8回の検討が重ねられた¹⁰。また、その検討会議の中では現行の府立高校の実態を把握すべく、「府立高校に関するアンケート」が実施された。以下、本論に関係が深い部分を中心に考察を加える。

当該アンケートは、2021年7月12～20日に府立高校の全日制・定時制過程の1年生9,653人（全日制9,366人、定時制夜間77人、定時制昼間210人）を対象に実施された。回答率は55.2%で、5,329人（全日制5,098人、定時制夜間37人、定時制昼間194人）から回答があった。アンケートから見てきたことは概ね3点である。1つは進路選択への満足度で、図4の通り、全日制・定時制に関わらず「現在の府立高校には概ね満足している（約8割）」ということであった。これは肯定的に受け止めて良いだろう。2つは志望動機で、「自宅から近い・通いやすい（21.0%）」「学校の雰囲気が良い（11.9%）」「合格できそう（11.3%）」「入部したい部活動（10.8%）」で過半数を超え、「特色ある取り組み・授業」と回答した生徒はわずか6.3%であった（図5）。すなわち、全体としては教育的特色による訴求力が弱いことが明らかになった。ただし、全日制のその他の専門学科については、これが逆転し、「特色ある取り組み・授業」が21.3%と理由の1位になっている。すなわち、教育的特色そのものが入学動機に直結していると推察される。3つは府立高校の魅力で、全体としては「部活動（16.7%）」「学校行事（12.7%）」「生活面の規律（9.9%）」「学習指導の充実（9.3%）」「校風やイメージ（8.6%）」で過半数を超えており、教育的特色は訴求力が弱い結果となっている（図6）。ただし、こちらも全日制のその他の専門学科については、一位こそ僅差で部活動（13.2%）となっているものの、「大学等進学に向けた指導の充実」が12.9%、「学習指導の充実（少人数授業、補習等）」が11.3%と、教育的特色そのものが魅力に直結しており、専門学科を創設した意義が数字に現れている。

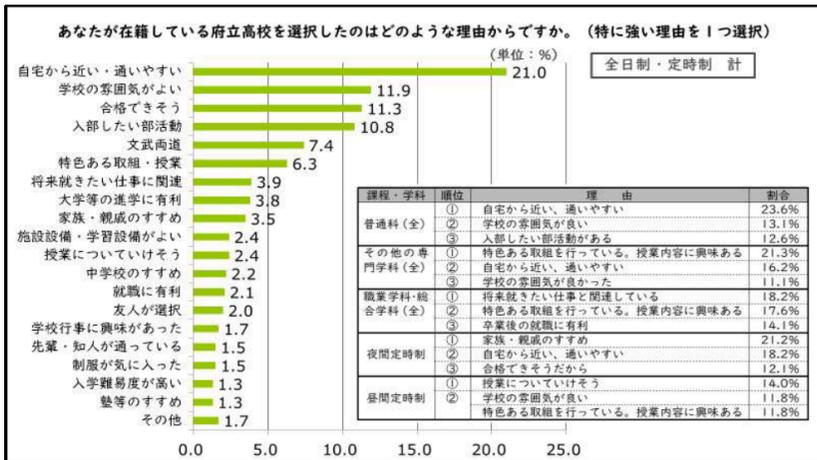
以上の結果から、府立高校は全体としての満足度は高いものの、志望動機や魅力については教育的特色が上位には来ておらず、訴求力が弱いと総括せざるを得ない。翻って、専門学科については、教育的特色そのものが入学動機や魅力に直結しており、ここに今後の可能性も含めて探究的な学習およびその発信の重要性を見ることができる、と小括できよう。

図4 進路選択の満足度



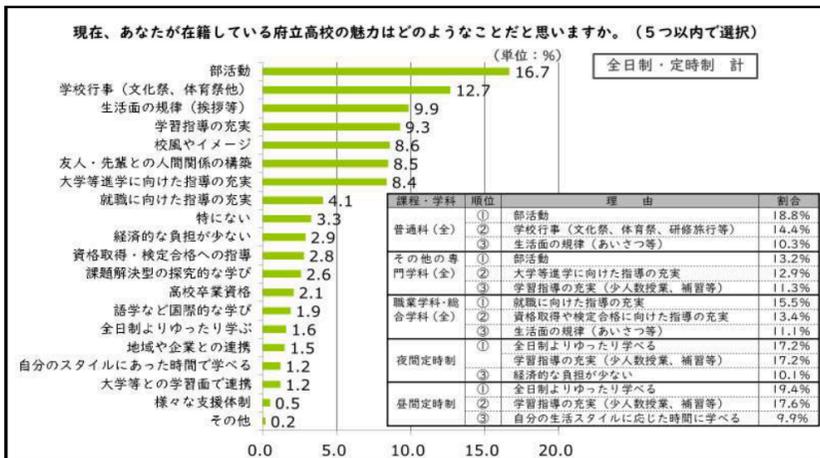
(出所)京都府教育委員会(2021c)

図5 府立高校の選択理由



(出所)京都府教育委員会(2021c)

図6 府立高校の魅力



(出所)京都府教育委員会(2021c)

3.3 京都府立高校における高大連携の実態

次に府立高校の高大連携について概観してみる。表2の通り、全体としては、ほぼ全ての府立高校で何かしらの高大連携の取り組みが進んでいることが分かる。

全体に共通する特徴としては、以下の3点が見て取れる。1つはパートナーとしては大学教員がカウンターパートとなっているという点である。ただし、中には研究員や大学院、学部生が伴走する事例もある。2つは地域性で、パートナーとなる大学は京都府内の大学が多いが、京阪神など近隣府県はもとより、中には海外の大学もパートナーになっているという点である。これは高大連携におけるテーマや専門性の重要性が地域性を越えるということを意味する。そして、3つはテーマで、どの高校もそれぞれの教育課程の特色に基づいた高大連携に取り組んでいる高校が多いという点である。とりわけ、SSHやSGHなどの文科省事業も含め、本論で照射する探究的な学習のための高大連携が多いのが特徴と言えよう。

しかし、同時に課題的特徴も透けて見えてくる。例えば、概して見学や1回限りの講義受講など単発の関わりが多く、また組織単位で見ても、一高校対一大学という「1対1」の関係性が多い。加えて、それがゆえに学校運営や高校のカリキュラム全体における位置付けが分かりにくい。確かに単発のニュースとして発信はあるものの、HPなどで高大連携を特色ある取り組みとしてコンテンツ化している高校はほぼ皆無であった。断定こそできないが、この背景には、小中で機能している学校運営協議会が高校レベルでは、まだ途上の段階にあり、外部の目が入りにくいことも影響しているのだろう。ともあれ、以上の考察より、高大連携の実態把握については、京都の事例でも現行ではまだ十分とは言えず、翻って、その一つの切り口あるいは入り口として多くの高校が取り組む探究学習を取り上げるのがもっとも相応しいテーマであることが分かる。

そこで、以下では、京都府北部でいち早く高大連携による探究的な学習を取り入れてきた京都府立福知山高等学校、総合的な探究の時間やフィールド探究部など部活で高大連携による探究的な学習を実施し、全国的な実績を残している京都府立宮津天橋高等学校宮津学舎（宮津高等学校）、そして、高校の魅力化コーディネーターを採用し、基礎自治体とも連携しながら高大連携による探究的な学習を実践している京都府立宮津天橋高等学校加悦谷学舎（加悦谷高等学校）の3校を事例に、校長等へのヒアリングを中心に比較考察を行い、現行の高大連携による探究的な学習の現状と課題を明らかにする。そして、最後にその比較考察から得られる示唆を導出したい。

なお、本論では深掘りしないが、中長期的な視点として、高校からの依頼に基づいて大学が協力するという片務的な関係では、持続可能性は担保できず、どうすれば、高校、大学双方にメリットを感じる相補的な関係になるのか、という視点も重要であることは言うまでもない。

表2 府立高校における高大連携一覧

高校名	概要
山城高校	【奈良県立医科大学】1年生文理総合科の全員が奈良県立医科大学附属病院を訪問し見学。 【シンガポール大学】1年生文理総合科の全員が大学を訪問して現地の大学生と交流を実施。
清明高校	【佛教大学】生徒が佛教大学通信教育課程の授業を受講し、高校の単位に認定できる取り組みを実施し、単位を認定。 【京都工芸繊維大学】清明高校の生徒が応用生物学系の長岡助教の研究室を訪問し、カイコの絹糸腺からDNA抽出。
鴨沂高校	【京都教育大学・京都府立大学・同志社大学他】教職を目指す学生が本校において教職インターンシップを実施。 【京都大学・京都府立大学・京都工芸繊維大学他】大学教員と本校教員が連携して、本校生徒に対して大学の教員が授業を実施。
洛北高校	【京都大学・京都府立大学等】課題研究の計画・実施・考察等について、大学教員等とセミナーを実施。 【京都大学・京都工芸繊維大学等】希望生徒が数名単位で研究室を訪問し、最先端の研究の実際を学習。
北稜高校	【総合地球環境学研究所】2年生文理コースの生徒30人程度を対象に研究員が地球環境問題に関して指導。 【京都光華女子大学】大学教員がSDGsをテーマに環境教育の授業を実施。チーム活動にも大学として協力。 【京都精華大学】京都精華大学の学長（ウスピ・サコ氏）からグローバルスタディー講演を受ける。
朱雀高校	【滋賀大学】2年生探究コースの全員が、SDGsについての講演を聞き、プレゼンテーションに活用。
洛東高校	【京都橘大学】普通科プログレスコースの2年生が「医療福祉」の授業にて講義を受講。 【華頂短期大学】普通科ライフデザインコース「ライフスキル」の授業にて講義を受講。
鳥羽高校	【大阪大学】総合的な探究の時間における課題研究ワークショップに参加。 【京都光華女子大学】グローバル科のSGH事業及び普通科の探究な学習の時間の年間を通して協力。京都府教育委員会のWWL事業にスマートAP (Advanced Program) に協力。 【京都橘大学】グローバル科のSGH事業及び普通科の探究な学習の時間の年間を通して協力。京都府教育委員会のWWL事業にスマートAP (Advanced Program) に協力。 【福知山公立大学】グローバル科のSGH事業及び普通科の探究な学習の時間の年間を通して協力。京都府教育委員会のWWL事業にスマートAP (Advanced Program) や高大連携事業に協力。遠隔教育システムを用いた大学の教育による講義を受講。
嵯峨野高校	【京都大学・京都工芸繊維大学・京都府立大学】サイエンスフィールドワーク他で連携。 【京都大学・大阪大学】探究活動（アカデミックラボ・スーパーサイエンスラボ）において連携。
北嵯峨高校	【長浜バイオ大学】2年生自然科学コースの生徒約20人が、研究室を訪問し、実験やプレゼン発表を実施。 【立命館大学】3年生スポーツ科学コースの生徒全員が、スポーツ栄養学の講義受講。
北桑田高校	【京都大学】京都大学リーダー育成プログラムへの協力及び生徒のプログラムへの参加。 【京都府立大学】京都フォレスト科と連携協定を締結の上、相互交流。
桂高校	【龍谷大学】1・2年生普通科を対象に探究活動を深めるための連携を年間を通じて実施。 【摂南大学】2・3年生対象に、新設された農学部の説明会を実施。
洛西高校	なし
桃山高校	【京都大学】自然科学科1年生が、京都大学防災研究所を訪問し、様々な体験型学習を実施（SSH事業の一環）。 【京都教育大学】1・2年生対象に、大学教員や大学院生等の指導による体験型授業を実施（SSH事業の一環）。
東稜高校	【京都光華女子大学】「環境と情報」の授業の中で、探究学習を取り入れながら大学教員、理科・地歴公民科の教員がチームティーチングを実施。 【京都文教短期大学】高大連携事業でキャリアコースを中心に特別授業を実施。 【京都橘大学】ライフマネジメントクラスの文化財保護学習の授業で連携。
洛水高校	【京都先端科学大学】理系の生徒について、大学での実験講座、本校での講義を実施。 【京都医健専門学校】理学療法、鍼灸、柔道整復についての講義、実習を実施。

福知山公立大学研究紀要(2022)

京都すばる高校	<p>【京都産業大学】 高大連携協定の中で、会計のプロフェッショナル人材の育成を目指し、合宿型の研修会へ参加、大学教員による講義受講。</p> <p>【京都産業大学・大阪工業大学・立命館大学・京都女子大学】 情報科学科1・2年生が体験授業と研究室訪問を実施。サイバー犯罪対策探究会に参加しサイバー犯罪防止策を提案・発表。</p>
向陽高校	<p>【関西大学】 大学見学会と出前講義を実施。全学年より希望者約100人参加。</p> <p>【京都先端科学大学】 大学と連携し、探究活動を実施。</p>
乙訓高校	<p>【京都工芸繊維大学、京都大学】 スポーツ健康科学科や理系コースで研究室訪問や実習等を実施。</p> <p>【立命館大学、びわこ成蹊スポーツ大学、同志社大学、関西大学等】 スポーツ健康科学科の専門教科で授業連携を実施。</p>
西乙訓高校	<p>【関西大学】 高大接続パイロット校</p> <p>【立命館大学】 理工学部「高大連携協定校アドバンスプログラム」</p>
東宇治高校	<p>【京都文教大学】 1・2年生「総合的な探究の時間」で、学年全員が出前授業を受講。</p>
菟道高校	<p>【京都大学】 2年生生理数コース生徒が京都大学宇治キャンパスを訪問し、講義を受け実験、施設見学。</p> <p>【京都工芸繊維大学】 2年生生理数コースで大学を訪問し、先生、院生が講義と実験を指導。留学生が「異文化理解」の講義を実施。</p>
城南菱創高校	<p>【京都大学】 1年生教養科学科の生徒全員が、化学研究所を訪問・見学。</p> <p>【奈良女子大学】 2年生教養科学科の生徒全員が、平城京跡を訪問・見学。</p>
城陽高校	<p>【関西の主要大学】 分野別進路ガイダンスや校内進学相談会を実施。</p> <p>【京都産業大学】 1年生生徒が京都産業大学を訪問し、一日大学生を体験。</p>
西城陽高校	<p>【京都産業大学】 大学教員による論文・プレゼンテーション指導を実施。</p> <p>【京都教育大学】 サイエンスプロジェクトの取組みとして、理系生徒が大学教員から科学に関する指導を受講。</p>
京都八幡高校	<p>【京都工芸繊維大学】 2年生自然科学コースの生徒が出前授業による実験・講義を受講。</p> <p>【京都大学】 2年生自然科学コースの生徒が、出前授業による実験・講義を受講。</p>
久御山高校	<p>【龍谷大学・摂南大学・びわこ成蹊大学等】 1年生が自己の進路について考えるために、各大学を訪問し、ガイダンス受講・施設見学等を実施。</p> <p>【同志社大学】 スポーツ総合専攻の生徒対処に、大学教員が特別支援学校との交流のための身体作り運動考案や卒業論文作成に当たり、指導・助言。</p>
田辺高校	<p>【金沢工業大学・福井工業大学・京都先端科学大学・大阪産業大学・高山自動車短期大学】 各大学と協定を締結し、様々な教育活動で連携。</p> <p>【兵庫県立大学・香川大学・同志社大学・金沢工業大学・福井工業大学】 1・2年生工学探究科の生徒全員が、夏季集中講座（1単位分）を実施。</p>
木津高校	<p>【京都大学農学部】 システム園芸科茶業専攻の3年生が大学生に茶着の実演を実施。</p> <p>【龍谷大学】 普通科特進コース1年生がキャンパス見学を実施。システム園芸科の希望者が農学部の研究室を訪問し実験を実施。</p>
南陽高校	<p>京都大学・京都府立大学】 サイエンスリサーチ科1年生の希望生徒が科学実験・実習体験活動を実施。</p>
亀岡高校	<p>【京都先端科学大学・京都府立大学】 探究文理科の生徒が講義受講、研究室訪問。</p> <p>【成安造形大学・嵯峨美術大学・京都芸術大学・京都精華大学・京都市立芸術大学】 美術・工芸専攻の1・2年生が大学の模擬授業を受講、大学見学。</p>
南丹高校	<p>【京都先端科学大学】 1年総合的探究系列が健康医療学部及びバイオ環境学部で大学教授の講義を聞き、トレーニングや生物化学分野の実験を体験。</p> <p>【龍谷大学】 3年生総合的な学習の時間の課題研究で環境・エネルギー問題、カーボンマイナスプロジェクト等について講義を受け、ワークショップを実施。</p>
園部高校	<p>【京都大学・京都工芸繊維大学・京都先端科学大学・京都教育大学】 1年生を対象に総合的な探究の時間において課題研究を実施。</p> <p>【京都産業大学】 Area Study(大学教員を招いて特別講義を実施)</p>
農芸高校	<p>【京都府立大学】 昨年度より連携協定を結び、農業分野において実習施設の相互訪問や研究活動での連携を実施。</p> <p>【京都先端科学大学】 バイオ環境学部において、農業や環境、バイオテクノロジー、食品科学に関わる講義を受講・実験。</p>
須知高校	<p>【京都先端科学大学】 普通科1・2年の生徒が文系研究者の講義を受講。</p> <p>【福知山公立大学】 大学教員より主権者教育についての特別講義を受講。</p>
綾部高校	<p>【神戸大学】 特進コースの生徒が神戸大学の研究室を訪問し、講義を受講。</p>

福知山公立大学研究紀要(2022)

	【福知山公立大学】高校生みらい会議に生徒が参加。
綾部高校 (東)	【京都先端科学大学】1年農芸化学科の生徒全員が訪問し食品や環境に関する実験を実施。
福知山高校	【京都大学】WVL高校生サミットにて留学生がTAとして参加。 【神戸大学】文理科学科1年生が特別講義を受講、大学教員がポスター発表の講評、2年生の研究発表会を審査・講評。 【京都府立医科大学】医学進学プログラムとして連携講座を実施。 【福知山公立大学】1・2年生が探究についての特別講義や国際理解教育について講演会を受講。大学教員が学校運営協議会に委員として参加。高校生みらい会議に生徒が参加。 【京都工芸繊維大学】大学教員が学校運営協議会に委員として参加。
福知山高校 (三和)	【福知山公立大学】大学教員が学校運営協議会に委員として参加。 【京都工芸繊維大学】大学教員が学校運営協議会に委員として参加。
工業高校	【京都産業大学・京都先端科学大学】2年生(希望者のみ)大学を訪問し、研究室や施設を見学。
大江高校	【福知山公立大学】FUKUFUKU光秀(仮)で福知山の学生による文化祭を行う。大学教員からキャリアに関する講義を受講。 【立命館大学】1年生地域創生科の生徒が、地域創生のマインドづくりのワークショップを実施。
東舞鶴高校	【京都大学】1年生発展コースと2年生科学探究選択者が、日本の哺乳類の生物多様性について学ぶ。 【三重大学】2年生科学探究選択者が、地域の土壌資源を調査し、持続可能な農業についての探究を実施。 【福知山公立大学】大学教員から探究学習についての特別講義を受講。
東舞鶴高校 (浮島)	【福知山公立大学】大学教員から主権者教育についての特別講義を受講。
西舞鶴高校	【京都工芸繊維大学】理数探究科を対象に、出前授業による講義や実験の指導を受ける。 【京都大学(水産実験所)】1年生理数探究科の地球環境と海の生態系で、講義や実習の指導を受ける。 【福知山公立大学】高校生みらい会議に生徒が参加。
海洋高校	【京都先端科学大学】「海洋ごみ」に関する研究活動について大学教員が指導助言。 【福井県立大学】「海洋湧水」に関する研究活動について大学教員が指導助言。 【福知山公立大学】高校生みらい会議に生徒が参加。
宮津天橋高校 (宮津)	【京都府立医科大学】希望生徒が高大連携講座やインターンシップに参加。 【京都教育大学】2年総学(探究活動)における課題研究をサポート。 【福知山公立大学】生徒発表を講評。高校生みらい会議に生徒が参加。
宮津天橋高校 (加悦谷)	【福知山公立大学】1年生の探究授業で講話、また生徒発表を講評。高校生みらい会議に生徒が参加。 【京都先端科学大学】アスリートスポーツコースの生徒が施設見学後、体育スポーツの授業体験を実施。
峰山高校	【京都大学・大阪大学】本校の特色ある教育活動であるアカデミックミネ「科学の教室」「人文科学の教室」の講師として招聘。 【京都教育大学・立命館大学】本校の特色ある教育活動である「いさなご探究」:総合的な探究の時間の一環として、講師を招聘したり、インターネットを活用したやり取りを通して深い探究活動を実施。 【福知山公立大学】生徒発表を講評。高校生みらい会議に生徒が参加。
丹後緑風高校 (網野)	【福知山公立大学】高校生みらい会議に生徒が参加。
丹後緑風高校 (久美浜)	【福知山公立大学】みらいクリエイティブ科の生徒が、訪問し交流を。高校生みらい会議に生徒が参加。 【京都先端科学大学】アグリサイエンス科の生徒が、訪問し交流。
清新高校	【福知山公立大学】高校生みらい会議に生徒が参加。

(出所)京都府教育委員会(2021b)より筆者加筆修正

4. 事例研究

4.1 京都府立福知山高等学校の高大連携による探究的な学習

京都府立福知山高等学校（以下、福高）は、1901（明治34）年に京都府立第3中学校¹¹として創立された府立高校の中でも最も伝統ある高校の1つである。卒業生は本校・分校合わせて約4万人を数え、名実ともに京都府北部は言うまでもなく、京都府を代表する進学校¹²である。また、2015年には京都府内で府立高校として4事例（公立高校では5事例）しかない附属中学校を開校するなど、中高一貫教育にも力を入れている¹³。教育理念は「個を活かし、公に生きる人間の育成」「グローバルに活躍する人間の育成」であり、全日制課程として普通科（定員160人）と文理科学科（定員40人）の2学科となっているほか、本論では触れないが昼間定時制課程として三和分校も持っている。普通科は着実に学力を伸ばし、多様な進路に対応する人材の育成を目指しており、文理科学科は難関国公立大学・医学部等を目指す進学に特化した人材を目指す専門学科である。目指す生徒像は、（1）自ら目標を立て、意欲を持って主体的に行動する生徒、（2）失敗を恐れずにチャレンジし、諦めず努力する生徒、（3）他者を思いやり、互いに認め合い、協働して取り組める生徒、（4）地域や社会の課題を自分事として捉え、解決に向けて行動しようとする生徒、（5）国際社会に関心を持ち、異文化理解を深め、グローバルな視野で考える生徒の5つである。そして、身につけてほしい力は、（1）感じる力、（2）考える力、（3）行動する力、（4）向上する力、（5）関わる力の5つであり、「5K力」と呼ばれている。

探究的な学習については、2007年4月に文理科学科が設置され、総合的な学習の時間を「みらい学」と称して、探究的な課題解決学習を開始しており、約15年の実績がある。開始数年間は個人でテーマを設定し探究学習を進め、2年次に研究発表会を行っていたようだが、数年後からは2年次にグループでテーマを設定し、探究の成果を研究発表会で発表する方式に変わったという（倉内2020）。また、普通科については、文理科学科の「みらい学（がく）」のような取組みをしたいという生徒の声が教員に寄せられ、「みらい考（こう）」と称して1年次に個人研究の形式で取組みを始めたとのことであった。

特徴としては、文理科学科の「みらい学」は、2クラス80名が大学での研究を視野に入れた研究活動を意識して地域課題、グローバル課題、基礎研究に取り組み、普通科の「みらい考」は4クラス160名がキャリア学習、地域課題解決学習を意識したテーマに取り組んでいることである。基本はグループ活動による探究学習で、テーマとしては、文理科学科では「三和町に交通空白地有償運送は取り入れ可能か?」「空き家のお試し移住で俺我地域の定住者を1.5倍にできるのか?」「福知山の養蚕業について、Youtubeを使って後継者を増やすことができるか?」「発展途上国の子ども達に高校生が教育の機会を与えるには?」、普通科では「フードロスを防ぐ取組として売れ残りのパンを安価に販売することは可能か?」「中学生に福知山高校の魅力を伝える広報とは?」「同緯度の上海とニューヨークの家の特徴をとって一般的な日本の家の課題を改善する」といったテ

まで探究が進んでおり、2021年度には「田舎力甲子園」（主催：福知山公立大学「田舎力甲子園」実行委員会）に普通科2年の8名が「3Fプロジェクト Fukuchiyama First Food bank」というアイデアで全国73策のうちの上位11策のファイナリストに選ばれたり、全国602チームが出場する「全国高等学校デザイン選手権大会」の決勝大会(10チーム)に出場することが決まったりと、成果が出始めている。さらに、福高では2015年以降付属中学校が開学した関係から、中学生も「みらい楽（がく）」という課題解決型学習に取り組んでいる。

探究的な学習の運営については、2007年の立ち上げ時から「文理科学推進部」が担当していたが、2020年からはその部を新学習指導要領に向け普通科のみらい考も体系的に実施すべく組織改変された「みらい探究部」という部門が対外的な窓口役となっている。また、校長とみらい探究部長が密にコミュニケーションも取りながら進められており、2018年度には校長から「地域の課題を自分事として捉えられるような取組み」及び「SDGsの視点を踏まえた取組み」をするようみらい探究部長に指示があり、現在の形に至ったという。まさに校長のリーダーシップである。当然のことながら、府立高校ゆえに校長含め人事異動はつきものであるが、このような探究学習を専門的に企画・運営する部署や人材を明らかにすることにより、ビジョンやノウハウの継承が行われ、持続可能性が担保されているということであろう。また、2021年度からは学校運営協議会（コミュニティ・スクール）がおかれ、そこに地域に明るい学外者がメンバーとして加わり、外部からの校長が作成する学校運営の基本方針について様々な見地から意見交換や情報交換ができる体制が出来上がっている¹⁴。当然のことながら、そこでの主たる議題も探究的な学習や連携の在り方が中心となっている。

以上をまとめると、表3のようになる。いずれにしても、福高の門をくぐれば、高校3年間、附属中学校からであれば6年間、全生徒が探究的な学習を経験するカリキュラムが実現しているところに最大の特徴がある。何よりこうした取組みを新学習指導要領の全面実施のはるか前から実施しているところに先見性があると言える。

表3 福知山高等学校の探究的な学習の概要

	文理科学科「みらい学」	普通科「みらい考」
1年次	「研究活動の手法を学ぶ」ことをねらいとして作法を学び、地域課題やSDGs等について探究活動を行い、研究交流会を実施。	前半に自らの進路や職業について主体的に考えるキャリア学習を、後半に身近な課題をテーマにした探究活動を行い、課題探究交流会を実施。
2年次	グループに分かれてテーマを設定し、探究活動を実施。研究発表会を行い、その後は個人レポートを作成。	自らテーマを設定して探究活動を行い、課題探究発表会を実施。

(出所) ヒアリングをもとに筆者作成

次に高大連携による探究活動について考察する。校長へのヒアリング¹⁵によれば、「みらい学」立ち上げ当時の2007年から特別講義や探究活動の指導・講評等を大学に依頼し、実現してきたという。その際には、府教委の連携事業等（京大連携事業、知的好奇心をくすぐる体験授業等）も活用し、京都大学や京都府立医科大学など国公立大学との連携をベースにしつつ、とりわけ近年は、地域の課題を自分事として捉えられるような取組みを推進すべく、福知山公立大学との連携に力を入れているとのことであった。なお、福高は府教委の文科省WWL(World Wide Learning)事業の共同実施校¹⁶にも指定されており、京都大学大学院の留学生の指導を受けながら、鳥羽高校、洛北高校、秋田南高校、九里学園高等学校、那覇国際高校など全国の志を同じくする高校生との交流できる高校生WWLサミットに参加したり、学校の枠を超えて大学教員から探究学習の動機づけや方法論について体系的に学べるスマートAP(Advanced Program)という教育プログラムに参加したりという生徒もいる。また、オーストラリアのクイーンズ工科大学の講義を生徒が受講し英語でレポートを書いたり、マレーシア・シンガポールの大学生や高校生と交流する海外研修を実施したり、文科省のアジア高校生架け橋プロジェクトを活用してベトナム(2020年度)やインドネシア(2021年度)からの留学生と交流したりと、グローバルな高大連携も展開している。

他方、高大連携による探究学習における課題については3点あるとのことであった。1点はこれからの時代、探究的な学習で地域課題やSDGsをテーマにしているが、まだ表面的なことを調べて終わるものが多く、リサーチクエスチョンへのアプローチの仕方や教員の関わり方も含め、探究学習の年間計画や方法においてさらなる改善が必要とのことであった。翻って、これは課題の本質に気付いてほしいとの高校側の気持ちの表れであり、高大(社)連携をより活用していくことが有効と思われる。2点はここ数年で地域課題に関する取組みが増えた分、地域以外の分野に触れる機会が減少する傾向にあり、今後はグローバル課題についても増加させていきたいとのことであった。そして、そのためには校外活動に使う時間保障の視点も必要ということである。言うまでもなく、生徒が様々な分野に興味・関心をもち、それが将来の進路につながることを期待され、ここにも高大(社)連携のさらなるニーズがあると言えよう。3点は、附属中を擁する高校ならではの悩みであるが、教員も多忙な中、文理科学科・普通科・附属中学校それぞれで高大連携を行っていくのは、担当の負担が非常に大きく、教科と総探のバランスの在り方も含めて、指導体制の見直しが必要とのことであった。この点については、後述する高校魅力化コーディネータなどの活用が参考になるだろう。

いずれにしても、本事例は課題はいくつかあるものの、約15年に渡る高大連携をベースにしながらも、文科省や府教委など新しい枠組みによる連携も積極的にも参画しながら探究的な学習が進められている貴重な事例であり、高大連携による探究学習の実態を知る上で非常に示唆に富む事例と言えるだろう。

4.2 京都府立宮津天橋高等学校（宮津学舎）の高大連携による探究的な学習

京都府立宮津天橋高等学校宮津学舎（以下、宮高）は、1903（明治36）年に京都府立第4中学校として創立され、福高と同じく、府立高校の中でも長い伝統を持つ高校、また京都府北部を代表する進学校¹⁷である。2020年度から学舎制¹⁸の導入により宮津天橋高等学校宮津学舎となっており、2020～2021年度に入学した現1、2年生は宮津天橋高校としての生徒、2019年度に入学した現3年生は宮津高校としての生徒、と2つの高校（名）が並存する形になっている。

教育目標は「我が国や地域の発展に貢献する「社会的使命感と青雲の志を持つ人」の育成する」であり、学科は普通科（定員130人）と建築科（30人）がある。育てる生徒像は、（1）自主自律の精神を持って学び続ける人、（2）個性や能力を伸ばし夢に挑戦する人、（3）人や社会とつながり未来を創造する人、の3つを掲げている。

探究的な学習については、現在の探究推進部長がその職に就く前に、少子化や社会の変容、新学習指導要領の告示、総合型選抜の拡充などの外部環境の変化を受け、総合的な学習の時間について「いまのままで大丈夫だろうか」と問題意識を持ち、2015年にプロジェクト会議を発足させたところから本格的な検討が始まった。同年には「フィールド探究同好会」という部活もでき、生徒たちの探究的な学習もスタートし、2017年度には「フィールド探究部」へと昇格した。そして、主幹教諭と中堅の教諭8名で構成されるプロジェクト会議メンバーは堀川高校や京都教育付属高校など先行して探究的な学習を進める高校6校に視察に行ったりしながら、意見交換を重ね、2017年に部長1名、部員1名から成る探究推進部が構内に創設され、この年から総合的な探究の時間が始まっている（多々納 2021）。したがって、宮高では2017年度を「探究元年」と位置づけているという。

探究的な学習の運営については、2本立てとなっており（表4）、まず「総合的な探究の時間（2単位）」については、探究推進部が作成した「探究テキスト（1年生用・2年生用）」をもとに、全教員で取り組まれている。具体的には教員の専門性に引きつけ、人文・社会・理科・数学・行動科学・スポーツ健康・TANGology という名称のゼミを導入し、16名の教員がそれぞれ4～5テーマを担当している。基本はグループ活動による探究学習であるが、伴走のスタイルは「併走＋半歩前後」とし、生徒たちの主体性が重視されている。また月1回ゼミの担当教員が集まりミーティングが重ねられている。

次に「フィールド探究部」については、4名の教員が顧問として伴走している。こちらの部員については3年生7名、2年生11名、1年生4名（2021年度）と20名前後であるので、まさに少数精鋭の探究的な学習となっている。フィールド探究部のキーワードは「ホンモノを感じる!」「地域で科学、地域を科学」であり、（1）自立する個性の育成、（2）安心と愉しさを、（3）REALIZE！（気づく、実現する）という価値観を大切にしている。そして、平日の放課後や土日に丹後地域の歴史文化・地域社会、自然・生物など、生徒各自が自らの興味・関心に応じたテーマを設定し、地域の多様な協力を得ながら、調査はもとより、稀少生物の保護、里山学習、川の環境保

全、幼児向け自然体験イベント、高校向けスタディツアーなど課題解決に資する活動を展開している。すなわち、生徒も教員も「毎日が探究」と言っても過言ではない。2018年度には宮津市の巨樹調査に取り組み、調べた巨樹は3年間で61種2942本に及ぶ。こうした活動の結果、2016～2018年の「全国高校歴史フォーラム」において連続入賞したほか、2019年の全国ユース環境活動発表大会近畿大会では先生が選ぶ特別賞、2021年の日本森林学会第8回高校生ポスター発表では最優秀賞、同年の全国高校生マイプロジェクトアワード全国サミットでは全国優秀賞、2022年の日本自然保護協会の日本自然保護大賞（子ども・学生部門）を受賞するなど輝かしい結果を残している。

表4 宮津天橋高等学校（宮津学舎）の探究的な学習の概要

	総合的な探究の時間	フィールド探究部
1年次	<ul style="list-style-type: none"> ・ 取組みの中で「型」を習得する ・ 興味関心からコースを選択する ・ 地域の課題にフォーカスする ・ 自分自身と地域を題材にして、対話を通して理解を深める 	<p>「ホンモノを感じる！」 「地域で科学、地域を科学」をキーワードに丹後地域の歴史文化・地域社会、自然・生物を研究する活動を展開。</p>
2年次	<ul style="list-style-type: none"> ・ 興味関心があることや課題意識を持っていること、希望進路に関わることなどで自由にテーマを設定し、自分のテーマを究める ・ 具体的なアクションを起こす ・ 誰か（何か）とつながる 	
3年次	—	

（出所）ヒアリングをもとに筆者作成

次に高大連携による探究活動について考察する。校長へのヒアリング¹⁹によれば、宮高では、現在、京都教育大学、滋賀県立大学、福知山公立大学、龍谷大学という国公立の4大学と連携している。さらに大学に加え、総合地球環境研究所、京都職業能力短期大学校、京都府立丹後郷土資料館、兵庫県立人と自然の博物館、京都府立丹後海と星の見える丘公園、地元自治体（宮津市・与謝野町・京丹後市・伊根町）、地元NPO、地域おこし協力隊という研究機関や資料館や博物館、行政とも連携した体制を構築している。その意味では、高大連携というよりは「高大社連携」と捉えるのが正確な表現であろう。ともあれ、こうした関係者が総合的な探究の時間の中間報告会、成果報告会のコメンテーターを務めており、非常に多様な意見や助言が入る仕組みができて²⁰。こうしたネットワークは、校長のネットワークだったり、たまたま大学から見学依頼があったり、生徒の探究のテーマに関する専門家を探していたところ繋がったなど、その時々でネットワークで拡大していったという。その他、生徒が取り組むテーマによって、生徒たちが直接大学教授等に連絡を取ることも推奨しているため、その範囲は広範に及ぶ。さらに、フィールド探究部の方でも近年は高大連携が進んでおり、2021年度はフィールド探究部と福知山公立大学と共同で北前船文化として

のお雑煮調査が実施された事例がある（読売新聞 2022）。また、2022年度からは後述する加悦谷学舎と合同で学校運営協議会が創設される予定とのことである。

他方、高大連携による探究学習における課題については3点あるとのことであった。1つは、現在の高大連携は、フィールド探究部の活動を除けば、中間報告会や成果発表会当日の参観と講評とスポット的な関わりに留まっており、これをいかに日常的な活動への関わりや伴走に変えられるかが課題だという。ただ、この課題についてはオンラインなどを活用することで今後解消可能であろう。2つは核となる教員の人材育成ということである。例えば、先述の探究推進部長とフィールド探究部の顧問は同一教員であり、現行の宮高の探究の運営やネットワークなどはやはりその教員の熱意とスキルによるところが大きい。一方、公立高校ゆえにいつかの人事異動は避けられない。したがって、次の探究推進部やフィールド探究部の長を担う教員の育成や体制作りが課題ということであった。これは言うは易く、行うは難いのが現実であり、やや難問である。3つは後述する加悦谷学舎の探究活動との連携視点の弱さである。ただし、現在は学舎制というだけでそれぞれ独立はしているものの、2022年度からは校長や事務局長、また学校運営協議会も一本化される。そのことも踏まえれば、例えばインプットの機会や発表会などにおいて高大連携のネットワークを共有するなど、より一層の連携は可能と考える。

いずにしても、本事例も課題はいくつかあるものの、「学習と部活動」という従来の高校スタイルから「学習と部活動と探究活動」という3つのチャンネルを持つ稀有な事例であり、高大社連携による探究学習の実態を知る上で非常に示唆に富む事例と言える。

4.3 京都府立宮津天橋高等学校（加悦谷学舎）の高大連携による探究的な学習

京都府立宮津天橋高等学校加悦谷学舎（以下、加悦高）は、1958（昭和23）年に与謝野町の旧野田川町に加悦谷高校として創立され、少人数クラスや遠隔教育システムによる新しい教育手法を取り入れつつ、全国大会で優勝経験があるウエイトリフティング部など全国区の部活動も擁する文武両道のバランスの取れた高校である²¹。2020年度から学舎制の導入により宮津天橋高等学校加悦谷学舎となっており、2020～2021年度に入学した現1、2年生は宮津天橋高校としての生徒、2019年度に入学した現3年生は加悦谷高校としての生徒、と2つの高校（名）が並存する形になっている。教育目標は（1）生徒一人一人の可能性を伸ばし、希望進路の実現を図るとともに、社会に貢献できる人材の育成、（2）伝統と文化を尊重し、郷土を愛し、地域社会を守り受け継ぐ人材の育成、（3）豊かで幸せな人生を送ることができるよう主体的に学び続ける人材の育成であり、1年生から3年生まで共通である。学科は普通科（定員80人）のみだが、2・3年次から大学進学に対応するアドバンスコース、多様な進路希望に対応するスタンダードコース、世界大会・全国大会を目指すアスリートスポーツコースに分かれる。育てる生徒像は、（1）理想を実現しようとする高い志や意欲を持ち、主体的に学びに向かい、人生を切り拓いていくことができる生徒、（2）対

話や議論を通じて、自分の考えを根拠とともに伝えるとともに、他者への思いやりを持って多様な人々と協働していくことができる生徒、(3)よりより人生や社会の在り方を考え、新たな価値を創造して行くとともに、新たな問題・解決につなげていくことができる生徒、の3つを掲げている。

探究的な学習については、2017年度に1年生の総学の時間を活用して試行が始まり、2018年度より1・2年生を対象にその取組みが本格実施となっている。また3年生についても地歴科の教員による探究的な学習の試行が始まった。そして、2019年度からは総学から総探へと完全移行²²し、与謝野町との連携のもと、京都府初となる「高校魅力化コーディネーター」（以下、コーディネーター）を導入し、展開を拡げている。具体的には、表5の通り、1年生は自分探究と地域探究、2年生は地域探究（課題設定から実践）で基本はグループ活動とし、3年生について再び自分探究（自分の進路の言語化、人に伝える）というカリキュラムとなっている。なお、コーディネーターによる探究的な学習への伴走というモデルは、島根県海士町の隠岐島前高校が2012年度に高校魅力化コーディネーターを配置したのが嚆矢であり、現在全国に拡がりつつある（島根県教育委員会 2021）²³。ただし、島根県内では現在ほとんどの地域に配置され、2020年5月現在で約50人の高校魅力化コーディネーターがいるが、京都府では加悦高が初の事例である²⁴。

探究的な学習の運営については、各学年部の教員とコーディネーターと協力しながら進めており、特に地域との連携（窓口）はコーディネーターの果たす役割が大きい。また、2021年度に教務部を担当部署とすることが決まり、副校長をはじめ管理職が探究的な学習の進行管理の推進に関わるようになっていく。

表5 宮津天橋高等学校（加悦谷学舎）の探究的な学習の概要

	総合的な探究の時間
2019年度 (1年目)	<ul style="list-style-type: none"> ・1学期：自分探究(自分のやりたいこと、興味あることに関して調べ学習→まとめ、発表：調べてまとめる、を学ぶ)。 ・2学期以降：自分の興味関心事と社会とのつながりを知るために、与謝野町の総合計画を活用。役場の人へインタビューなどして、自分の興味関心があるもの、さらに深めたいものを選び、調べ学習。最後にまとめ、発表(ポスター)
2020年度 (2年目)	<ul style="list-style-type: none"> ・1学期：自分の興味関心があることを見つける。興味関心度合いに近い者同士でチームを作る。テーマ設定を行う。 ・2学期以降：テーマに則って、調べ学習+フィールドワーク(アンケート実施や、地域の人へのインタビューを実施。調べ学習の延長)。最後に、調べたことや分かったことをまとめ、発表(パワーポイント)。
2021年度 (3年目)	<ul style="list-style-type: none"> ・1学期：新聞の読み方、そこから自分の興味ある記事を選出、要約する、という流れを身につける(複数回実施)。 ・2学期以降：自分が深めたいテーマを設定。それに対して調査・解決策提案・何かしらの実践を行う。最後にまとめて発表(発表形式は自分で考える。スライドでもポスターでも可)。

(出所) ヒアリングをもとに筆者作成

次に高大連携による探究活動について考察する。校長及びコーディネーターへのヒアリング²⁵によると、地元の大学（福知山公立大学）との連携を重視している、とのことであった。事実、2020年度から生徒向けの探究に関する話題提供や発表会における講評を複数の大学教員で担当している。その他、与謝野町（教育委員会含む）との連携を積極的に進めており、例えば、町長との対話授業や生徒が興味のある与謝野町の業種業界の方を招き対話する「Kayadani 仕事図鑑」の実施、「よさの高校生広報室@みらい」というチームを結成してのSNS発信などを行っている。また、こうした活動を高校が発行する広報誌や町教育委員会が毎月発行する広報誌を活用し、地元中学生向けにも積極的に発信をしている。その意味においては、加悦高も高大にとどまらず「高大社連携」による探究学習と言って良いだろう。

他方、高大連携による探究学習における課題については3点あるとのことであった。1つは探究的な学習における内容の体系化の難しさである。具体的には「よさの学」が核になることについての共通理解は得られたとしても、全体のカリキュラムの体系化が難しいという。確かに進学校ということであれば、「大学で何を学びたいか」に直結させる設計中心で組めば良いだけなので分かりやすい。しかし、加悦高の場合は生徒の進路が他校よりも多様であるため、モデルが複雑にならざるを得ないという。ただ、これは逆に言えば、校外にヒントを求める契機にもなり、「Kayadani 仕事図鑑」という連携事業が生まれたのも、そうした背景があったからと推察される。また、この部分については大学がキャリア教育の分脈で伴走できる伸び代もある。2つは、探究の成果物に対する多様なフィードバックが乏しいという点である。確かに現行の中間発表会や成果発表会において大学教員や町職員が参加しているが、先述の宮高などに比べれば、多様性には乏しいきらいがあった。しかし、先述の通り、2022年度からは宮津学舎と加悦谷学舎共通の学校運営協議会が設置されるため、このあたりは早晩解消されていく可能性が高いと言える。3つは探究的な学習の歴史が浅いということもあり、教員陣の経験値の蓄積が乏しいという点である。さらに言えば、加悦高においては他校にない論点としてコーディネーターと教員の差別化あるいは連携の在り方を今後どう考えるかという検討も必要であろう。また、その際には、コーディネーターの予算は町の予算を活用していることから、財政的な側面も含めた自治体との議論も欠かせない。

いずれにしても、本事例も課題はいくつかあるものの、京都府初の高校魅力化コーディネーターを活用しながら、高大連携はもとより基礎自治体とも密に連携し、探究的な学習が進められている先行事例であり、高大連携による探究学習の実態を知る上で非常に示唆に富む事例と言える。

5. 考察

5.1 比較考察からの示唆

前章ではそれぞれ特徴の違う3つの事例を取り上げてきた訳が、ここでは、こうした事例の比較考察を通して、高大連携による探究的な学習における今後への示唆というものを3点ほど導出し、整理

する。

まず1つは、カウンターパートの多様性、言葉を換えれば「高大社連携」という視点の重要性である。「高大連携」とはその言葉通り、大学が高校の主たるカウンターパートである。しかし、言うまでもなく、大学にもそれぞれ強みと弱みがある。すなわち、大学にない視点は、3校とも共通して大学以外から取り入れていた点に注目したい。そして、大学についても1大学にこだわる必要はない。むしろ良い意味での「使い分け」をしながら、高大社連携を模索すれば良いと考えられる。具体的には、国公立大学、研究機関や博物館、資料館、地元のNPO、地元企業などテーマに応じてカウンターパートを増やすことが有効である。その際、今後は学校運営協議会というアライアンスの活用も非常に重要となってくる。そして、そこでは校長のリーダーシップも必要不可欠である。ともあれ、1つ目の重要な示唆は「高大連携」ではなく、「高大社連携」であるとまとめられよう。

2つは「専門部署」と「コーディネーター」の必要性である。先の事例に見られたように、「みらい探究部」(福高)、「探究推進部」(宮高)といった専門部署は探究学習の司令塔になっているだけでなく、地域の窓口役も果たしていた。その意味では、今後学校をあげて探究学習を進めるためには、まずは高校内で高大(社)連携による探究学習を進めるための専門部署を設置することが必要不可欠であろう。そして、その際、自治体との連携がうまく行き、人件費を獲得できるのであれば、「高校魅力化コーディネーター」のようなコーディネーター人材を獲得できれば鬼に金棒である。さらに、島根県のように教育寮やコンソーシアムを伴走するコーディネーター人材も獲得できれば、なお良い。いずれにしても、高大(社)連携による探究学習を成功裏に導くためには、専門部署の設置、コーディネーター人材の確保と育成が重要というのが2つ目の示唆である。

3つは、部活動など課外における探究的な学習の重要性である。先述の通り、2022年度から新しい学習指導要領が全面実施となり、全国の4,856²⁶の高校で一斉に探究的な学習が進むこととなる。そうすると、先に取り上げた3例のような好例(good practice)も生まれれば、その逆も然りであろう。すなわち、誤解を恐れずに言えば、「探究(学習)格差」や、若者言葉で言う「探究ガチャ」のようなことが生まれる可能性がある。いずれにせよ、そのような展開も見据えるならば、もはや総探の時間や正課の探究科目だけで特色化や差別化するのには難しい。そこで注目したいのが、宮高の「フィールド探究部」のような、意欲の高い生徒が集まる探究を冠した部活動の存在である。今後はこうした課外における探究学習に高大(社)連携の伸び代や差別化ポイントがあるだろうというのが3つ目の示唆である。

その他、高大連携そのものではないが、他校との連携や交流、他流試合も重要である。例えば、福高ではWWLのキーワードで繋がる全国の高校と一緒に学んだり、対話したりする機会が多く設けられていた。また、宮高ではマイプロや学会発表などを通して、全国の高校生と他流試合をする機会が多く設けられていた。そして、本文では触れなかったが、3高とも有志の生徒が「高校生みらい会議」という京都府北部の5市2町が仕掛ける課外の探究型PBLに現在参加している。また福高と加悦高に限っては、こちらも有志の生徒が「高大社連携フューチャーセッション」という大学コンソが主催

する事業の実行委員にオンラインを活用しながら参加している。このように部活以外で地域や学校の枠を超えた生徒や大人と出会う機会もキャリア教育の観点から重要と言えるだろう。

いずれにしても、限られた事例からの結論ではあるが、本論で取り上げた事例から導出できる「高大社連携」、「専門部署」「コーディネーター」「部活動」「他流試合」「オンライン活用」といったキーワードが、高大（社）連携による探究学習をさらにより良いものにしていくための示唆ではないか、というのが結語である。

5.2 おわりに

本論では、高大連携による探究的な学習を高校サイドの視点を中心に考察してきたが、最後に探究と研究の共通点と異同を巡って一言、問題提起をし、結びに代えたい。

探究とは辞書的には「物事の本質を探ってみること（広辞苑）」とある。すなわち、ほぼ研究と同義である。したがって、探究を高大連携の手段として捉えても、はたまた目的として捉えたとしても、この両者は共通点が多く、親和性が高い。一方、大学の教員は教育者の顔だけでなく、研究者の顔を併せ持っているが、高校の教員は基本的に教育者の顔しか持たない。それがゆえに、新学習指導要領を真に実現しようと思うならば、実は生徒だけでなく、高校の教員もが「自立した学習者」になるための努力が不可欠という事実が気がつくこととなる。教育の世界に「探究」を導入したとされるジョン・デューイは「昨日の教え方で今日教えれば、子どもの未来を奪う」と指摘したが、この言葉はまさに現代に向けたメッセージとも解される。とはいえ、多様化かつ多忙化する高校の現場を鑑みれば、現実的に高校教員全員が「自立した学習者」になるというのは不可能に近い。だからこそ「社会に開かれた教育課程」が必要であり、だからこそ「高大（社）連携による探究学習」という補完的アプローチがより重要となるとここでは強調したい。一方、高大連携による探究的な学習というのは、大学サイドから見た場合にも、大いにメリットがある。というのも、2025年の大学入学選抜では新学習指導要領で学んだ高校生たちが受験、また入学してくる訳で、たとえば総合選抜や学校推薦選抜などの大学入学者選抜のあり方はどう考えれば良いのか、探究学習の経験を蓄積してきた学生に対して現行の初年次教育や演習、卒業研究などのカリキュラムは問題ないのかなど、現行の大学の在り方を見つめ直すきっかけに必ずや繋がると考えられるからである。事実、山田（2021）などの研究により、高校での探究的な学習が、大学の研究につながる深い学びに繋がっているということはすでに実証されている。

いずれにしても、これまで大学入学者選抜、高校教育、大学教育がある意味バラバラで進んできた「高大接続」が、まさに「三者一体の高大接続改革」となり、「高大連携から高大接続」に昇華する現実が眼前にまできている。そして、この議論の次にはきっと小中高大（社）連携あるいは接続による探究学習という議論が早晚登場することになるであろう。また、こうした動きは若者の主権者教育やシティズンシップ教育、ひいては地域公共人材育成にも繋がっていく可能性も高い。これらの論点については、紙幅の関係もあり本論では触れることが出来なかった。また稿をあらためて論じてみたい。

本研究は、科学研究補助金（19K02795，代表：乾明紀）の助成を受けたものである。

謝辞

本論を執筆するにあたり、ご協力いただきました京都府立福知山高等学校、京都府立宮津天橋高等学校宮津学舎、京都府立宮津天橋高等学校加悦谷学舎の関係者の皆さまに深くお礼申し上げます。

《参考文献》

- (1) IDE 大学協会、2021 年入学者選抜、IDE 現代の高等教育、No. 632 (2021)
- (2) 乾明紀・田中誠樹・竹林祥子・大泉幸寛・宮崎雄史郎・ミューリニコラス・久保友美・杉岡秀紀・高野拓樹・サトウタツヤ、チームで探究活動を行う生徒から見た総合学習の促進要因と課題 (1) : 京都府立鳥羽高校のイノベーション探究 I の実践から、京都光華女子大学 京都光華女子大学短期大学部研究紀要、58、pp. 123-141 (2020)
- (3) 乾明紀・田中誠樹・竹林祥子・大泉幸寛・ミューリニコラス・杉岡秀紀・高野拓樹・サトウタツヤ、キャリアを展望できる探究活動—京都府立鳥羽高等学校イノベーション探究 II の実践から—、京都橘大学研究紀要、第 48 号、京都橘大学研究紀要編集委員会、pp. 1-19 (2022)
- (4) 江頭知遼・加藤久雄・登り山和希・白武義治・浦田恵子、学生視点から考える地域課題解決学数を通じた高大連携に関する研究 II—高大連携型プロジェクトにおけるルーブリックによる評価と検証—、長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要、18 巻 1 号、長崎ウエスレヤン大学、pp. 61-72 (2020)
- (5) 川口潔、立命館高大接続システムの構築に向けて—高大接続教育の新展開、各学部（特にグローバル系学部）との連携・強化—、立命館高等教育研究、第 21 号、立命館大学教育開発推進機構、pp. 37-55 (2021)
- (6) 京都府教育委員会、第 2 期京都府教育振興プラン (2021a)
- (7) 京都府教育委員会、第 3 回府立高校の在り方ビジョン（仮称）検討会議資料 (2021a)
- (8) 京都府教育委員会、第 4 回府立高校の在り方ビジョン（仮称）検討会議資料 (2021c)
- (9) 京都府教育委員会、京都府立公立高等学校スクールガイド 2021 (2021)
- (10) 京都府立福知山高等学校ホームページ (<http://www.kyoto-be.ne.jp/fukuchiyama-hs/cms/>) (2022 年 1 月 31 日閲覧)
- (11) 京都府立宮津高等学校 (<http://www.kyoto-be.ne.jp/miyazu-hs/cms/>) (2022 年 1 月 31 日閲覧)
- (12) 京都府立宮津天橋高等学校 (<https://www.kyoto-be.ne.jp/miyazutenkyou-hs/>) (2022 年 1 月 31 日閲覧)
- (13) 倉内邦行、これまでのコロナ禍対応を振り返って—福知山高校—、京都府 WWL フォーラム講演資料 (2020)
- (14) 公益財団法人大学コンソーシアム京都ホームページ (<https://www.consortium.or.jp/project/kodai>) (2022 年 1 月 31 日閲覧)
- (15) 五浦哲也・椿達「総合的な学習（探究）の時間」における高大連携プログラムの開発（II）—高等学校における教育現場の実態調査から—、北海道情報大学紀要、第 30 巻第 1 号、pp. 35-54 (2018)
- (16) 五浦哲也・椿達「総合的な探究の時間」における高大連携プログラムの開発（I）—高等学校における教育現場の実態調査から—、北海道情報大学紀要、第 30 巻第 2 号、pp. 35-54 (2019)
- (17) 島根県教育委員会、高校魅力化コーディネーターという仕事 2020—チームで担う「コーディネーター」機能、(2021)
- (18) 須田順子・須子雅好・奥野剛史・中村仁・鈴木勝、東京都と電通大による高大連携：課題探究教室、大学の物理教育、27、日本物理学会、大学の物理教育編集委員会、pp. 118-120 (2021)

- (19) 宗宇、高大連携から学部教育改革のデザインへ、創生ジャーナル Human and Society、vol. 2、新潟大学キャリア創生研究会、pp. 43-45 (2019)
- (20) 総務省、統計で見る都道府県のすがた 2021 (2021)
- (21) 醍醐身奈、「総合的な学習の時間」と特別活動における学生サポーターの役割—高校生と大学の調査結果からの考察—、目白大学高等教育研究、第 27 号、目白大学教育研究所 pp. 103-108 (2021)
- (22) 高野拓樹・松原久・糟野譲司・乾明紀・久保友美・杉岡秀紀・サトウタツヤ、高大連携教育を用いた探究学習に関する実践的研究—探究学習に対する生徒のイメージやスキルに影響を及ぼす要因—、地域連携教育研究、京都大学学際融合教育研究推進センター地域連携教育研究推進ユニット、pp. 33-49 (2021)
- (23) 多々納智「REALIZE!ゼロから始めた探究の現在地～生徒の「やりたい」を形に～」第 19 回高大連携教育フォーラム事例報告書資料 (2021)
- (24) 田中博之編著、高等学校 探究授業の創り方、学事出版 (2021)
- (25) 筒井和幸・本管正嗣・鈴木直・藤井和成・浅川誠・伊藤博介・山本健、高大連携による探究活動を中心とした物理教区の試み、物理教育、第 1 巻、日本物理教育学会、pp. 13-16 (2012)
- (26) 椿達・五浦哲也、「総合的な学習（探究）の時間」における高大連携プログラムの開発（Ⅰ）—実態及び期待と準備に関する調査分析—、北海道情報大学紀要、第 30 巻第 1 号、pp. 15-34 (2018)
- (27) 椿達・五浦哲也、「総合的な学習（探究）の時間」における高大連携プログラムの開発（Ⅲ）—プログラムの内容を導くための調査分析—、北海道情報大学紀要、第 31 巻第 1 号、pp. 1-20 (2019)
- (28) 椿達・五浦哲也、「総合的な学習（探究）の時間」における高大連携プログラムの開発（Ⅳ）—通信制高校の調査を通して—、北海道情報大学紀要、第 32 巻第 1 号、pp. 1-20 (2020)
- (29) 中村琢、高大連携による高校生の探究活動—高校生への放射線課題研究指導の実践—、大学の物理教育、19、日本物理学会、大学の物理教育編集委員会、pp. 111-114 (2013)
- (30) 橋本淳史・菊池真、地域の探究と学び—兵庫県立御影高等学校における高大連携授業・GS 人文地理の取り組み—、兵庫地理、兵庫地理学協会、pp. 47-56 (2021)、
- (31) 原田恵子、探究的学習において求めたい高大連携のあり方、大学時報、日本私立大学連盟、pp. 86-89 (2014)
- (32) 細矢衛・小野田鷹柚・齋藤匡紀・山根有貴・古志優佳・植山俊宏、嵯峨野高校アカデミック・ラボ『日本文学から見る近・現代』に対する大学院生・大学生・研究生の支援・指導に関する実践的研究、京都教育大学教育実践研究紀要、京都教育大学第 18 号、pp. 123-132 (2018)
- (33) 堀一成・坂尻彰宏・進藤修一・柿澤寿信・金泓権・田中誠樹・竹林祥子・大泉幸寛・宮崎雄史郎、高大連携により取り組む高校生に対するアカデミック・ライティング教育の実践、大阪大学高等教育研究、8、pp. 51-60 (2019)
- (34) 堀籠崇・田中一裕、高大連携から学部教育改革のデザインへ：高大接続を視野に入れた課題探究型学修モデルの開発を通じた大学教育改革、創生ジャーナル human and society、vol. 2、新潟大学キャリア創生研究会、pp. 43-45 (2019)
- (35) 村上敬一・田島幹大・吉平綾加、地方方言を題材とした高大連携による教育活動の実践—徳島県立池田高校探究科と徳島大学総合科学部の取組から—、日本方言研究会第 104 回研究発表会発表原稿集、日本方言研究会、pp. 41-44 (2017)
- (36) 文部科学省「高大接続改革」ホームページ
(https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/koudai/index.htm) (2022 年 1 月 31 日閲覧)
- (37) 文部科学省、高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 総合的な探究の時間（時間編）(2018)
- (38) 文部科学省、学校基本調査
(https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm) (2022 年 1 月 31 日閲覧)
- (39) 山田剛史、探究的な学びは大学での学びにどのような影響をもたらすのか、第 19 回高大連携教育フォーラム基調講演資料、大学コンソーシアム京都 (2021)
- (40) 与謝野町教育委員会、Kayadani 通信 From Yosano、4 月号～10 月号 (2021)
- (41) 読売新聞、宮津の雑煮、多様な文化、1 月 6 日朝刊 (2022)

〈注〉

-
- 1 小学校では 2020 年度から、中学校では 2021 年度から、すでに先行して導入されている。
- 2 「情報・メディアリテラシー、コミュニケーション力」、「分析力、問題発見・解決力、創造力」、「協働力、自己規律力、責任感・協調性、社会的責任感」を指す。
- 3 ①相互作用的に道具を用いる、②異質な集団で交流する、③自律的に活動するという 3 領域から構成される。
- 4 筆者は京都府立鳥羽高校学校の SGH のプログラムづくりから参画し、毎年 1 年生向けの講義を受け持つ共に、総合的な探究の時間の中間発表会や成果報告会のコメンテーターを務めている。
- 5 筆者は兵庫県立生野高校と同柏原高校の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」に参画し、それぞれの高校で運営指導委員会の副委員長を務めている。
- 6 2021 年入学者選抜の運用面をめぐる議論の迷走については、IDE (2021) が詳しい。
- 7 京都府教育委員会では、2021 年度より複数の大学教員によるスマート AP (Advanced Program)、2022 年度より複数大学と複数高校で大学の先取り履修が始まるが、まだ一部の学校の取組みである。
- 8 京都市立堀川高等学校が 1999 年に設置した「人間探究科」「自然探究科」による「探究基礎」という取り組みが嚆矢とされる。ただし、京都市立高校は政令指定都市の高校であり、政令指定都市が全国 20 しかないことを踏まえると、特殊な事例となる蓋然性が高いため、本論では取り扱わない。
- 9 高大連携推進室の委員は国立大学、公立大学、私立大学の教員 7 人から構成され、筆者も 2017 年度より高大連携推進室の室員として、高大社連携フューチャーセッションのコーディネーターを例年担当している。京都高大連携研究協議会協議会は大学のみならず、京都教育委員会、京都市教育委員会、京都府私立中学高等学校連合会、京都商工議会所も構成メンバーとなっており、国公私立はもとより産学公による座組みが成立している。
- 10 委員は学識経験者、保護者代表、市町教育委員会、企業関係者、学校関係者、公立中学校校長、府立高校校長など 10 人で構成され、筆者も委員の一人として参加している。
- 11 京都府立第一中学校は 1870 年に設立された京都府立洛北高校、京都府立第二中学校は 1900 年に設立された京都府立鳥羽高校、京都府立第四中学校は 1903 年に設立された京都府宮津天橋高校である。
- 12 2020 年度の進学実績は国公立大学 107 人、関関同立 85 人、産近甲龍 168 人という実績となっている。
- 13 他に京都府立洛北高等学校、京都府立園部高等学校、京都市立西京高等学校、京都府立南陽高等学校が中高一貫教育を行っている。
- 14 筆者も学校運営協議会の一委員として議論に加わっている。
- 15 2022 年 1 月 21 日に京都府立福知山高等学校の宮下繁校長にオンラインで実施。
- 16 京都府教育委員会が管理機関で、京都府立鳥羽高等学校が拠点校。
- 17 2020 年度の進学実績は、国立大学への進学が 30~35%、私立大学が 40~50%、短大・専門学校 15~20%、就職が 5%となっている。
- 18 近隣の高校を 1 つの高校とし、学校運営において統一した基本方針のもと、今ある高校の校舎を「学舎」としてそれぞれ活用し、連携・交流を積極的に行うことにより、複数の校舎を持つ高校として機能させるもの。
- 19 2022 年 1 月 24 日に京都府立宮津高等学校・京都府立宮津天橋高等学校の深田聡校長にオンラインで実施。
- 20 2021 年度の中間報告会から筆者も講評者として参加している。
- 21 2020 年度の進路実績は、国立大学、私立大学、短期大学、看護学校、各種学校・専門学校への進学、大企業・中小企業への就職など幅広い。
- 22 「なぜ人々は地方から離れていくのか」「京都北部の児童虐待」「地産地消で二酸化炭素を減らそう!」「海ゴミプロジェクト始動!」など 14 テーマ (グループ)。
- 23 島根県では高校魅力化コーディネーターとは別に、探究的な学習をサポートする実習教員、教育寮に住みながら高校生をサポートするハウスマスター、高校魅力化コンソーシアムの構築・運営に携わるコンソーシアム運営マネージャーという人材導入も進んでいる。
- 24 現在は加悦高のほか、京都府立峰山高等学校、京都府立丹後緑風高等学校網野学舎、京都府立丹後緑風高等学校久美浜学舎へと広がっている。
- 25 2022 年 1 月 24 日に京都府立加悦谷高等学校の藤田浩校長に、2022 年 1 月 31 日に長谷川夕起コーディネーターにオンラインで実施。
- 26 文部科学省の学校基本調査 (https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm) (2022 年 1 月 31 日閲覧) より。